

体験版

# イセカイサイクロン

-アースの風の戦士達-

かーや・ぱっせ

――よ。 戦士よ。

目覚めるのです。

今 「ローブン」と「アース」が  
影によって滅ぼされようとしています。

戦士は あなたを含め  
五人 存在しています。

そして あなた以外の戦士は  
「アース」から現れます。

あなたは  
「ローブン」と「アース」  
この 二つの世界の 架け橋となり

アースの戦士達と 共に  
「七つの道具」を 集め

「影を討ち滅ぼす」という  
戦士の使命を 全うするのです！

……覚悟は 良いですね？

さあ 戦士よ。  
「アース」への扉を  
開くのです……！

## ひと夏の探索

---

ある八月の始め。アスファルトの上を並んで歩く、少年と少女がいた。二人は同じ体操着を着ており、それぞれで大きめのエナメルバッグを肩にかけていた。

「今日も暑いね！」

「あっち一なあ……さすが猛暑日だぜ……」

「ねえ、まだ飲み物残ってる？」

「……ああ。水道水で良いなら」

少年はバッグから水筒を取り出し、少女に放り投げた。

「やった！ありがとう！」

「——そういえば、あいつ、帰る前にもがばがばと水を飲んでたような……」

「ぶはっ！生き返った！はい、ありがとう！」

「おう——っておい！もう空っぽじゃねえか！」

「さあ健！早く帰ろう！」

「待てマルー！……たく、相変わらず自由な奴だな」

大きくため息をついた少年は、先に駆けてしまった少女を追いかけるのだった。

マルーと呼ばれていた少女の名前は「丸山真理奈」。彼女が動くたびに、ぴんと結ったおさがが軽やかに跳ねる。明るい水色の瞳は、雲一つない青空を映していた。

一方、健と呼ばれていた少年の名前は「望月健」。静かな夜のような瞳でマルーの動向を見守っていると。

「おいマルー前！」

「えっあっ！ごめんなさいお兄さん——」

「ちゃんと周りを見ろ。自転車の人とぶつかる場所だったぞ」

「ごめんごめん、次から気を付ける！」

そう言ってマルーはまた駆け出す。先程と変わらない——無邪気に走る姿を目の当たりにし、健は呆れ返るのだった。

「あっ！」

しばらく走っていると、先頭のマルーが声を上げた。

「ねえ健！向こうでしばらく休んでいこうよ！」

マルーが指差すは、八月の太陽を一身に浴びる深緑の森。健は小さく返事をし、二人で木陰に飛び込んだ。

「ここから吹いてくる風がとっても気持ちいいんだよね！」

「——げっ。ここ噂の森じゃねえか」

「噂って？」

「ここの森の木を伐ろうとしたら凶暴な動物が襲いかかってきたきたっつー話。一時新聞で話題だったんだぞ」

「そっかあ。“風の森”にはそんな噂があったんだね！」

「何だそのベタな名前は」

「風が無かった日でもね、ここだけは涼しい風が吹いていたんだ。だから風の森って名前を——あ！そうだ！」

マルーは早々に支度をし、木陰を抜けた。

「私、面白いことを思い付いちゃったから先に帰るね！」

「は？」

あ然としたまま立ち尽くす健を置いて、マルーは全速力で森を後にしたのだった……。

健と別れたマルーは家路に着き、食事と身支度を済ませると、凶鑑を片手に“風の森”へとやって来た。

「この森だったら夏休みの自由研究にぴったりだよね！」

早速マルーは森へ足を踏み入れる。木を通じて射してくる柔らかな光が、まるでマルーに微笑みかけているようだった。

「森の中には初めて入ったけど、涼しいし、空気も澄んでいるし！本当、いいところ！」

悠々と歩くマルー。そこに、草陰からうさぎが現れた。喉から絞ったような声で鳴くそのうさぎは、全身がパンダに似た柄に包まれていた。

「こんなうさぎも初めて見た！とっても可愛い！」

すかさずうさぎと同じ目線になるように屈んだマルーは、両手を広げてみせる。「こっちへおいで！」と声をかけると、うさぎは応えるように首を傾げた。

やがてうさぎはマルーに向かって駆け出す、のだが。予想以上の速さ——まるで弾丸のように飛び込んでくる……！

マルーはとっさに腕で自分をかばった！その腕にためらいなく噛み付くうさぎ！声を上げながらも噛まれた腕を必死に振り回し、何とかうさぎをほどくと、マルーはその場から逃げ出した。

「結構深く噛まれちゃった……私、何もしていないのに！」

噛まれた腕を気かけながら逃げるマルーにふと、うなじへ衝撃が走る！その勢いがマルーを前方へ跳ね飛ばした！

身体を起こした瞬間！追い打ちをかけるようにうさぎが肩に噛み付いてきたのだった！

「——もう！お願いだから！離してっ！」

マルーとうさぎは攻防を繰り返し、やっとの思いで肩からうさぎを離し、投げ飛ばした！

うさぎはすぐに体勢を立て直し、マルーに威嚇。マルーもうさぎから目を離さずに腰を落とす。

「このままじゃあ、引くに引けないよ……」

マルーは、うさぎの殺気で前進も後退も出来なくなってしまっていた。

しかし刹那！ぴしゃりと水で打ちつけたかのような音と光がマルーとうさぎに飛び込んだのだ！

マルーが目を開けた時、目の前にいたはずのうさぎは姿を消していた。

「……あれ？いつの間に——」

動揺を隠せないマルーの背後で、強い風が吹く。振り返ってみるも、若葉が高く舞い上がり落ちる様子しか見られない。

「全く。こんな危険なところでどうして子供一人でやって来るのかしら——」

マルーへ、注ぐように声が聞こえた。声は木々に紛れ、どこから聞こえているのか分からない。彼女に分かることは一つ——声の主が女性であることだけであった。

「あなたは誰！？どこにいるの！？私、あなたにお礼が言いたいのに！」

森の木々が揺れる中、マルーは女性と思われる声からの返答を待つ。

「……そうね。森の守り人、とでも名乗っておきましょう！それがいいわ——あっ、お礼は結構よ。大人しくこの森から出ていってもらえたら、それでいいわ」

「え？」

「この森には、さっきのような怖い生き物がたくさんいるの。私が偶然通りかかったからあなたは助かったけど、普通なら助かっていないんだから」

「……あの。助けてくれたことは本当に嬉しいんですけど、私、夏休みの自由研究の為にこの森を調べているので、もう少しここにいさせてくれませんか？」

「研究の為に——あなた、危険な目に合った後なのによく言えるわね！」

「あんなに危険な動物がいるって知ってもらう為にも！もう少しここで調べさせて下さい！ここで出会った動物には近づかないように気を付けます！だから、お願いしますっ！」

「……仕方がないわね」

ぱちん！と指を鳴らす音がした途端、風で若葉と土埃が舞い上がる！

「悪いけど、話が通じないようだから、力技で追い出すわ」

「そんな——待ってよ守り人さん——！」

徐々に風は強くなり、やがてマルーの視界は遮られた。

「もう二度と、好奇心だけで入らないように。いいわね？」

「守り人さん待って——！」

風は守り人を呼ぶ声をも連れ去り、視界を晴らす。あっけなくマルーは、風の森から追い出されてしまったのだった。

## 風の森

---

それからのマルーは、誰の目から見てもおかしかった。

気合を込めた声で、“風の森”へ入ってゆくマルー。森がそよ風に揺れたように音をたてると、やがて森の入り口からマルーが戻って来た。

「……もう一回！」

そうしてまた森に向かって一直線。この繰り返しだ。

「あいつ、何やっているんだ……」

幾度も森の出入りし、マルーはへとへとになって戻って来た。

「——ああー！ダメだあーっ！」

寝転がったマルーは虚ろな目で、まだ鮮やかな青空を眺めた。

「……どうしよう」

「何してるんだよマルー」

頭上で聞こえた声に振り返ったマルー。買い物袋を提げた健と目が合った。

「何があったんだ？さっきから出たり入ったり繰り返して」

「だって、忘れ物が取りたいのに入れられないもん！」

「どういうことだマルー——？おい」

返答に苦しんでいる様子だった健の表情が急に陰しくなり、束の間もなくマルーとの距離を詰めた。

「……何、健？」

「やっぱりだ。お前ケガしているじゃねえか、腕」

「ああ、これ？さっきこの森の中で動物に噛まれちゃって！」

「ならまずはその腕を治さねえと」

「えっ、待って——」

「待たねえぞ」

ほら早く、と健が強引にマルーを引っ張ってゆく。

「ちゃんと歩くから！離してよ！」

「手え放したらどうせまた戻るだろ？」

「だってあの凶鑑、お母さんのものだから——なくしたってなったら怒られちゃうもん！」

「凶鑑よりケガを治すことが先だ。すぐ治さねえと悪くなっちゃう。それに、少し離れたくらいじゃ凶鑑はなくならねえよ」

「でも……！」

「俺も探すのを手伝う」

「本当！？」

「ああ。だからまずはそのケガを治すぞ。いいな？」

「……ありがとう健！じゃあ早速行こう！」

マルーはすぐさま健を追い越し駆けてしまう。横断歩道を渡り、住宅街を抜け、やがて前方にマンションが見えた。二人はエントランスを過ぎ、階段をしばらく上ったところで、ある階の扉をケンが開けた。

「ここで待っているよ」

マルーに一声かけ、健は中に入っていった。

戻って来た健が持ち出したものは救急箱。マルーの腕を手に取り、手早く傷に手当てを施してゆく……。

「よし、こんなもんだな」

「ガーゼとかネットとかされて、何だか大ケガした気分だよ」

「噛まれ傷は意外と怖いんだ。調べ終わったらすぐ病院へ行けよ」

「ありがとう！これでまた向こうに行けるね！」

よーし、と立ち上がり、階段を下りようとしたその時！

「あらマルー！帰っていたのね！」

突然名前を呼んできたスーツの女性が、マルーの道を塞ぐように抱きしめてきたのだ！

「ちょっと……いま後ろに健がいるから——」

「あら健君久しぶりー！」

今度は健に向かってまっしぐら。「元気にしてた？」等々世間話をしつつ、肩をがっしり掴んで離さない。笑顔満点で話す女性に対し健は——女性に気を使ってか、めいっぱい口角を上げている様子がかがえた。

「ところで健君、救急箱なんて出してどうかしたの？」

「え、ああ。マルーが噛まれたらしくて——」

「何ですって！？何に！？犬！？猫！？蛇！？」

「大丈夫！大したことないって！」

「大丈夫じゃないわ！うちの大事なマルーにもしものことがあったら——！」

「あの、落ち着いてください。とりあえず俺がこれで手当てしますから」

「そうそうそういうこと！んじゃ、今から健と自由研究しに行ってくるから！」

マルーは健に支度を急がせ、足早に階段を下りていった。

「——晩ご飯までには帰ってくるのよー！」

「はい！……ごめんね健。うちのお母さんうるさくて——」

「別に、慣れているし。さっさと見つけるからな、マルーが置いていった図鑑」

「うん！よろしくね！」

「それでさっさと病院へ行ってもらわねえと」

「あはは、そうだね」

やがて、風の森にたどり着いた二人は、早速森の中を歩いていった。マルーは進む道を凝視しながら、健は森の木の葉を見上げながら歩いた。

「この森は夕方みたいに涼しいな。風の森、と名付けただけはある」

「でしょ？この森はきっと有名になるよ！」

「別に有名にする必要はないんじゃ——」

「あっったあ——っ！」

突然マルーが目を輝かせ駆ける！

「あー見つかって良かった！」

マルーは地面に落ちていた図鑑を拾い上げ、胸に抱きしめた。

「良かったなマルー。後はお前を病院に連れていだけ……？何してるんだよ。帰るぞ」

健は引き返そうとしているのだが、マルーはその場で、ふっふっふっ——と、あからさまに悪者のような笑い方をしている。

「何を言っているのさ健。ダメだよ！さっきまで入れなかった森に今、こうして入れているんだもん。このまま自由研究を続けるよ！」

「馬鹿言うな。お前の母さんだって、ケガのことを心配していたじゃねえか」

「大丈夫！夕ご飯まではたっぷり時間があるし、それに自由研究の後で病院、でもいいでしょ？」

「おい待て！」という健の呼び掛けに応えることをせず、マルーはるんるんと森の奥へ進んでゆく。健はやむなく追いかけることにした……。

可憐な色をした様々な花が、あらゆるところで根を張っている中、マルーはある花の前で足を止めた。

「あれ？これは見たことないや。何だろう……」

マルーが見付けたものは、鉛筆のように細長いつぼみ。すぐに図鑑を開きページをめくるも首をかしげ、またページをめくり、首をかしげ、を繰り返す。

「見付けたか？」

「ううん。どこに載っているのか分からなくて」

見かねた様子の健が図鑑を借り、花を凝視したのち、大まかにページをめくった。

「……あつたぜ。多分こいつだ」

「ツキミソウ？——夜に咲いて光るんだ！見てみたいなあ」

「今日は見られねえぞ。夕飯までには帰るって自分で言ったじゃねえか」

「確かにそうだけど……さっきの健みたいに、また私のお母さんに言ってくれたら——」

「無理。これ以上はかばわねえ」

「残念……それじゃあ仕方がない。スケッチしたら次のを探すからね！」

「まだ続ける気か——分かった。こうなったらマルーの気が済むまで調べればいぜ」

「ありがとう！健！」

それからのマルーは、植物を見つけては図鑑を開き、スケッチやメモを書き留めた。健がそれを見守る中、気付く頃にはカラスが鳴き始めていた。

「そろそろ時間じゃねえか？」

「そうだね。今日は本当にありがとう！」

「気にするな。この後病院に行ってもらわねえとだからな」

「うん。健の言う通り、ちゃんと病院に行くよ」

二人が来た道に戻ろうとしたのだが。

「わわっ！」

「おっと！」

突然だった。大波が来たかのような揺れで、地面が二人を押し上げる！思わず二人はバランスを崩した！

「今のは何！？地震——わっ！」

「こんな揺れ方が地震かあ——つと！」

体勢を整えようとする二人をまた地面が跳ね飛ばす！突き出すような揺れは、回を重ねるごとに大きくなっていった……。

「……？あれ？治まった？」

「みたいだな——立てるか？手、貸すぜ……にしても、変な揺れ方だったな——」

「それに、さっきよりも静かになっちゃった」

「——マルー危ねえ！」

健がマルーを押し倒した直後、二人の背後で轟音と共に地面が跳躍！音が二人を吹き飛ばす！

「うう……ありがとうケ——！？」

振り返ったマルーが目を丸くする。

健も同じ方向へ視線を向けると、地面を這うように、若草色の長く太い物体が近づいていた——！

「逃げるぞマルー……っておい、何固まってるんだよ！」



健がいくらマルーの手を引いても、彼女は見開いたまま座り込んで動こうとしない。

「俺の声が聞こえねえのかっ!？」

「!! 健っ!？」

「こっちだ! ほら早く立て!」

健に言われるがまま立ち上がったマルーは手を引かれ、茂みへ飛び込んでゆく。また物体が襲ってきたらとんでもない。とにかく遠くへ——その一心で駆けるのだった。

「……ねえ健、少し休もう?」

乾いた声で呼ばれた健が振り返り、遠くを見た。目を凝らしても、すっかり影を落としてしまった森の中では、十数歩先の景色は黒に包まれてしまっている。

「大きな音はしないし、変な揺れもないから、ここで休んでも大丈夫だと思うんだ」

「……そうだな。少し休むか」

健の言葉を合図に、マルーは地べたでひざを抱えた。

「落ち着いたら言えよ。夕飯までには帰るんだからな」

「——本当に、帰ってこられるかな」

「あ?」

「来た道は大きく外れちゃったし、こんな暗い中じゃ道は分からない。それに、もしさっきのが現れたら……」

マルーは自分の頬を腕に沈めてゆく。腕の中で瞳は影を落としていった。

「落ち込むことはねえって。道が分からなきゃ調べればいい」

「地図なんて持っていないのに……」

どうするかを聞こうと顔を上げると、嫌に眩しい青い光が目に入ってきた。光の正体は、健が持つ手の平大の“スマートフォン”であった。

「この画面の真ん中、これが今、俺達がいる場所だ。二本指でこう、中に動かしていくと……見えた。上に俺ん家が見える」

「まさかここに出ているのって、地図?」

「そういうこと」

健はおもむろに立ち上がり、その場で辺りを見回し始めた。不思議に思ったマルーが、画面をのぞき込もうと健に近付いてみる。画面では、現在地から家に向かって扇状に光がのびていた。

「よし。この先を直進すれば家に帰ることができるはずだ」

「すごいよ健! 道が分かったら後は進むだけだね!」

マルーは、健が示してくれた方向へ茂みをかき分けていった。後を追う健は、画面の光でそっと前方を照らす。小さくお礼を言ったマルーは、青い光を味方に先へ進んでゆく……。

「あっ!」

「どうしたマルー?」

「この先で少し光ってる!」

「光ってる——っておい待て!」

二人は森の隙間からのぞく光へ向かった。駆ければ駆けるほど、光の正体が明るみになってくる!

「わあ——!」

「こりゃあすげえな——!」

それぞれ言ったきり。開いている口も、言葉もまばたきも忘れ、二人はただ光に魅入った。いくつもの光が、月の下で寄り添うようにきらめいていた。

「あれ？よく見たらこれ、最初に見付けたツキミソウだよ！」

「……お、確かに。はあ、こんな風に光るんだな——」

健は手元のスマートフォンの画面を自分の顔に向けると、かしや、と音を鳴らし始めた。画面には、淡い光を放つツキミソウの花が写っていた。

「あっ！今の音、カメラで撮った音でしょ！？」

「ああ、そうだけど」

「ずるい！私も入れて撮って！」

マルーは真っすぐにツキミソウの群生に入り込み、ポーズをとってみせた。健はそれを淡々と撮影する。

「健もこっちに来たら？私が撮るよ！」

「俺はいいよ。ツキミソウ撮れたし」

「とっても素敵な景色なんだもん！とにかく来て！」

「だからいいって」

「良くないの！いいから来て！」

マルーは健を、群生の中へ無理矢理引っ張る！

「……いいか？これを見たらさっさと家に——！」

渋々マルーと同じ場所に立った健だったが、そこでは息を漏らすしかなかった。

「——夢か、これは？」

「夢みたいな景色でしょ？じゃあ早速撮ろう！」

「おう……って、いつの間に俺のスマホを……何やってるんだ？」

「一緒に写りたいんだけど、私達の顔が見えないから写っているのかどうか——」

「貸せ。設定する」

健が指で画面を幾度か触る。上に掲げた画面には、光るツキミソウに囲まれた二人が映った。

「さすが健！それじゃあ——」

「おいやめろ！くつつくなって……！」

「どうして？写らないでしょ？」

「そりゃあ、そうだけどよ……」

健が横目でマルーを見る。不思議そうに見上げているマルーの澄んだ瞳に、熱くなっている自分の顔が映っていた。

「とにかくマルー、画面のほうを向け！さっさと撮るぞ！」

「はい！」

健は写真がぶれないように片腕を抑え、掛け声と共にシャッターを切った！

## 森に伏す怪物

---

数日後。

「いらっしやい凜ちゃん！マルーと一緒にこれ、食べて！」

「ありがとうございます！マルーのお母さん！」

「良いの良いの！ゆっくりして行って！」

「お母さんありがとう！」

「凜ちゃんに粗相のないようにね、マルー」

「分かってるって！」

マルーの返事を聞いた母親が立ち去った。凜ちゃん——赤石凜は、置かれたお菓子を一つつまむ。一方、マルーはお菓子に目もくれず、引き出しの中を探っていた。

「あったあった！見て！これが見せたかった写真だよ！」

マルーが取り出した写真には、数日前の夜に、風の森にて健が撮ってくれたものが写っていた。

「なんてきれいなもの！こんなに素敵な写真は見たことがないわ！」

「ありがとう、凜！」

「それにとってもいい雰囲気！“あいつ”にぐっつと！近付けたんじゃないかしら？」

「うん。近付かないと、カメラに入らないもん」

「そういう意味じゃないわよマルー」

「どういう意味？」

「……まあいいわ。マルーは鈍感なんだから——」

写真を返した凜は何だかつまらなそう。そんな顔をすることに疑問を感じつつ、マルーは写真を元の場所に戻した。

「それにしてもすごいわね。近所の森で撮れたんでしょう？」

「そうなんだ！これで自由研究もばっちりだし、風の森も有名になるよ！」

「風の森？って、またマルーが考えたの、名前？」

「うん！いい名前でしょ？！」

「あの変な森に名前をつけることはないわよ」

「そうかな？それに変な森だなんて——あっそうそう！」

突然、マルーはテーブルから身を乗り出した。

「あの写真を撮る前にね、変な事が起きたんだ！大きい波みみたいな揺れがあってそれから、こーんなに大きくて、こおーんなに長いのがね、私達に向かってどーん！って、襲いかかってきたの！」

「何よそれ」

だからね——と、腕を大きく広げて説明してみせるマルーに対し、凜は眉をひそめる。

「変な森とは言ったけど、その話はさすがに信じられないわ」

「本当なんだもん！健にも聞けば本当だって言うよ！」

「……そうね。マルーよりはあいつの方が信じられるわ」

「じゃあ健のところに行くしかない！」

「え、今から行くつもり？」

「もちろんだよ！さあレッツゴー！」

マルーは部屋を飛び出し、母親へ呼びかけに行ってしまった。

「こうなるともう、止められないんだから……」

息をついた凜は、飲み物を口に含みそれから席を立った。部屋には包み紙が一枚とお菓子達、汗をかいた飲み物二つだけが残された。

凜がマルーの家を出た時には既に、マルーは健の家の呼び鈴を押し、会話をしていた。

「——分かりました。ありがとうございます！」

「マルー、どう？」

「友達と森の方へ行くって言って出掛けたみたい」

「もしかしてその森って——」

「行ってみよう！」

マルーと凜はマンションを離れた。住宅街を抜け、しばらく先の横断歩道を渡ると、風の森が見えてきた。そこでマルーは、風の森に入ろうとする健と一人の少年を見付けた。

「あっ！健いた！」

「おうマルー。赤石も一緒か」

「こんにちはー、マルー、赤石さん」

「タツツーも！こんにちは！」

「あんた達、夏休みも一緒に過ごしているのね」

「当たり前だろ？俺のダチなんだし」

「二人こそ、一緒にどうしたのー？もしかして、二人も自由研究をしに来たのー？」

「自由研究？」

「違うわよ。あんたを“ダチ”だという人に聞きに来たのよ。マルーが言っていることが本当かって」

「凜ってば、信じてくれないんだ。私達を襲った、大きくて長ーいの」

「……まあ、普通は信じられねえよな。仕方がねえ」

「どういうことよ？」

「赤石、マルーの話は本当だぜ。残念ながらな」

「だから、調べに行くんだよねー」

「そういうこと。じゃあな」

「またねー」

「そういうことって、ちょっと待ちなさい！」

凜の呼び掛けもむなしく、健とタツツー——大塚竜也は森の中に消えた。

「行っちゃったね……」

「もう。大丈夫なのかしらあの二人」

「うん……」

「とにかく危険だっていうことは、マルーの話で分かるわ。だから……マルー、どう思う？」

「うん……」

「マルー？ちょっと聞ってる！？」

「わっ！ごめんごめん、帰ろっか」

「帰るですって？よく言えたわねマルー！森の方ばかり気にしてたのに」

「そう、かなあ？」

「気になるのなら付き合うわよ」

「いいよ別に。何か……黙って付いていくのは二人に悪いし！」

「でも、気になるんでしょう？」

「……まあ、少し不安かな？」

「少しじゃないでしょう？と一っつても、不安なんでしょう？」

問いたですリンではあるが、マルーは答えようとしなない。

「もう！見てられないわ！」

リンが叫ぶと、マルーの後ろに回り背中を押し始めた！

「何するのさ！」

「気になるんでしょう！？それなら行くのよ、ほら！」

「行かないよ！だって、危ないんだよ！？リンのこと、巻き込みたくない！」

凜の手は止まった。自分を押す力が抜けてゆくことを感じたマルーは、心の中で胸をなで下ろした。

「ふーん。なるほどね」

そのような中で凜は、マルーの胸中を見透かしたように呟く。

「ということは、よ？あたしがもしこの場になかったら、マルーはもうこの森に入っている！っていうことよね？あたしを足手まといだ、って言っているみたい」

「そんなこと——！」

「そういうことでしょうか？でも、大丈夫よ！自分の身は自分で守るわ。それに、マルー一人では行かせられない。何かあった時にマルー一人だなんて、あたし、嫌なもの」

「凜……」

「さあ行きましょ！早くしないと見失うわよ！」

凜に根負けしたマルーは、二人で健達を追いかけることに決め、風の森へ入った。二人を照らす木漏れ日はとても優しくかった。

「さすがは森の中ね！涼しくて、それに空気が美味しいわ！」

楽しそうに森を眺める凜。対してマルーは眉間にしわを寄せていた。

「どうしたのよ。あまり楽しそうじゃないわね」

「だって……」

「無理矢理連れて来たことは謝るわ。でもあたし、マルーの決めきれない顔は見ていられなかったの」

「ううん。そうじゃないんだ」

「え？」

「何か、この前来たときよりも静かな気がして」

「……言われてみると、そうね。あたし達以外誰もいないってカンジ」

二人は足を止め、聞き耳をたてる。確かに、木々のささやきも動物の声も聞こえてこない。

「何だか気味が悪くなってきたわ。やっぱり帰った方がよかったのかも——」

「待って。どこかで音がする」

「音？」

森の中は妙に静かだ。しかし注意深く聞いてみると、ゆっくりと音が刻まれていることが分かる。まるで体の大きい動物が近づいてくるよう。

「この音。嫌な予感がする……うわっ！？」

「きゃあっ！」思わず凜がマルーに飛びついた！

「何よ今の！地崩れしたみたいな音！？」

「これってもしかしたら——！」

「待ちなさいマルー！まさか、音がした方へ行くつもりじゃないでしょうね？！」

「二人が危ないかもしれないよ！」

「ダメよ！危険だわ！」

「危険だとしても！二人の命が懸かってるかもしれないなら——っ！」

真っ直ぐに言い放ったマルーが、凜から離れてゆく。

「——もう！一人だけじゃ危ないんだからあつ！」

二人はやがて、音がした場所へたどり着く。そこではなんと、健と竜也が傷だらけで倒れていたのだ。

「ケン！タツツー！」

「待ってマルー！あれ！」

健達の元へ駆け出そうとしたマルーを、リンが押さえ、指を差す。その先では、太く長い物体を根のように生やした「植物の怪物」が存在していたのだ。頭から白い花を一つ、めいいっぱい開き、生ごみに似た臭いを漂わせながら、よだれのように液体を垂らしていた。

「マルー、助けを呼びに行きましょう！」

「ダメだよ！助けが来る前にはもう——！」

マルーは、付近にあった木の枝と小振りの石を数個拾い、怪物を見据える。

「ちょっとマルー！？戦うつもり！？」

マルーは凜の言葉を振り切るように一声！怪物に向かって駆け出し、手元の石を投げつけた！

石を感じ取った様子の怪物は、太く長い根をうねらせながら、ゆっくりマルーとの距離を詰める。こっちに来るな！と言わんばかりに、マルーが石と枝をひたすら投げ飛ばすものの、怪物はお構いなしに近付いてくる。

「マルー！逃げて！」

マルーが手持ち無沙汰になったことを感じた凜が叫ぶ！しかし、声が届くことはない——否、届かなくなっていた。

「どうしよう……あの時と同じ……！」

あの時の夜と同じ。長く太い根が、蛇のように私をにらみつけている。あの一撃が、あの夜無残に飛び散った地面のように、私をバラバラにしようとしている！

逃げなきゃ！頭では分かり切っていることが、今のマルーには出来なかった——足に力が入らないのだ。

「マルー危ないっ！」

「！！」

凜の声で我に返ったマルーだがもう遅かった。怪物の重い一撃で地面は跳ね飛び、その衝撃で凜が土埃と共に吹き飛ばされた！

「マルー……っ！返事をして！マルーっ！！」

視界が悪い中、マルーを呼ぶ声は間もなく静寂を連れて来た。かと思った刹那！鼓膜を引き裂きそうな音と閃光が、土埃を晴らしたのだ！

「何が起こったのかしら——」

凜の視線の先ではなんと、怪物はごろんとひっくり返っていたのだった。

「そこのあなた」

「！？あつ三人共！」

声に振り返ると、後ろで三人が横たわっていたのだ。しかし、凜を呼んだ者の姿は見当たらない。

「この三人を隠しなさい」

「隠す……って、あたし一人で？」

「いいからやりなさい。近くの茂みでいいわ」

「……はい」

渋々返事をした凜は、なるべく急いで三人を隠した。

「ふう……これで良いかしら？」

「ありがとう。あなたも茂みで大人しくしていなさい。絶対に顔を出さないことよ」

声の主が言い切った瞬間、真上の木の葉が揺れたかと思うとすぐに物音がし始めた。風で森が踊り、高い金属音と鈍い音が幾度も重なり合う。怪物の重い一撃も何度も響いた。

「ん、んんー……」

その中で、マルーは重いまぶたを開けた。

「マルー！起きたのね！」

「……あれ！？さっきの怪物は！？」

「誰かが代わりに戦っているわ。こうやって、あたし達を助けてからずっと」

「――まさか」

「ダメよ茂みから顔を出しちゃ！」

「うう……じゃあ、茂みの間から……」

「マルーったら……そんなに気になるの？」

「あれ？私達を助けてくれた人、いないみたいだよ？」

と思ったことも束の間。掛け声と共に威勢よく現れた者が、怪物に斬りかかる！

「この声！やっぱり守り人さんだ！」

目を輝かせるマルーが気になった凜は、マルーと同じように茂みの合間から覗いてみた。

「……？服装、明らかにOLさんよね？スカートが真っピンクとか――結構、派手ね」

「でもかっこいいよ！剣を振り回して、ほら！」

「ええーっ！？指から雷！？」

「わわっ！ダメだよ立っちゃ！」

慌てて凜の頭を押し込んだマルー。凜は両手を合わせ小さく謝った。

「とにかく大人しくしていよう？今は守り人さんが優勢みたいだから」

「そうね。倒してくれますようにって、祈っていきましょう？」

そんな二人を“OLのような女性”は横目で見ていた。

「あの子達何をやっているのかしら……まあいいわ。敵は幸い気付いていないみたい――」

女性はすぐ敵に視線を変え、短く息を吐いた。

大振りの剣で敵に斬りかかる女性――守り人は、雷と風を巧みに操り、戦ってゆく。一方、敵である植物の怪物は、いくつもの太い根で重い打撃を放ち続けていた。

「(敵の動きは読めるから問題ないけど、弱っている様子が全く見られないわ――決定打が必要ね)」

一度怪物から距離を置いた守り人は剣を握り直す。

「あれ？守り人さんの動きが止まったよ」

「どうしたのかしら――あっ！」

「すごい！守り人さんの先で光が出てる！大技炸裂かも！」

二人の期待が高まる……が、それはすぐに崩れ落ちた！

「わっ！？」

「きゃっ！！」

どどん！と大きく鈍い音がした！その音は地面に亀裂を走らせ、マルーと凜の間を引き離してしまったのだ！

「……凜ーっ！ケガは無いー！？」

「あたしは大丈夫よ！マルーは！？」

「私も平気——！？」

マルーが凜に安否を答えかけたその時！マルーの方へ何かが無造作に転がり込んだのだ！土埃を上げるその方向へ、マルーは駆ける。

そこで見付けたものは、無数の傷を負った守り人だった。まさか、優位に立っていたはずの守り人が、身も服もボロボロになって倒れているだなんて——マルーはその場で慌てふためくしかなかった。

「はぁ……油断したわ……」

「守り人さん！大丈夫ですか！？」

「私は大丈夫——ってあなた、この間の子じゃない。何故またここにいるの？」

「そんなことより！守り人さんのケガを何とかしなくちゃ！」

「それは無理ね。回復手段は尽きてしまったもの。だからもう戦うしかないわ。攻撃こそが、最大の防御……」

膝から崩れそうになりながらも、両足でしかと立った守り人。

「……あら？おかしいわ、私の剣がない！」

「大変！急いで守り人さんの武器を探さなくちゃ——」

「ちょっと化け物！二人を離しなさい——っえ！？きゃああっ！は、離してっ！」

「——どうしよう！凜と皆が捕まっちゃってる！」

「……あなたは私の剣を探して！私が時間を稼ぐ！」

「でもケガが——！」

マルーに有無を言わせぬまま守り人は、三人を捕まえた怪物の元へ飛び込んだ！

「……とにかく探さなきゃ！」



## 目覚めの戦士・マルー

---

慌てる心を必死に抑えながら、辺りを見回すマルー。すると、ある茂みから柄が顔を出しているところを発見した。

「あれを抜いて守り人さんに渡せば——！」

茂みから茂みへ次々とかき分け、マルーはついに柄を掴んだ！

「よし！後はこれを……引き上げれば……ってあれ！？ぬ、抜けなかつ！どうして——！」

力の限り引き抜こうとするのだがビクともしない。

やがてマルーは、勢いそのままにひっくり返ってしまった。それでもまた立ち上がり、マルーはもう一度柄を握る！

「お願い、抜けて！あなたの力が必要なの！」

「私の力が必要？」

「えっ？！——眩しい！！」

聞きなれない声がしたかと思うと、つばが黄金色に輝いた！

目が黄金の光に慣れると、景色はすっかり変わっていた。振り返っても、下を向いても、見上げても、洗練された無彩色のみが広がっていた。

「誰もいないみたい……一体どうなっているんだろう」

「貴女は——」

「？」

「貴女は誰？いつもの人じゃない……」

こう話しかけるは、黄金の翼を持つ、マルーより一回り大きい鳥。鮮やかな赤の瞳でじっとマルーを見つめている。

「私はマルー！あなたは？」

「私は、影に打ち勝つ五大戦士が手にする“フェニックスソード”を護るもの——フェニックス」

「フェニックス……ねえお願い力を貸して！私、守り人さんや皆の事を助けたいの！」

「……私の力を借りるということはすなわち、世界を護る“五大戦士”としての運命を背負うということ……その覚悟、貴女にある？」

「世界を護る？」

「今、「影」が二つの世界が滅ぼそうとしている。一つは魔法が存在する世界。もう一つは、貴女の世界——」

「影が、世界を滅ぼす……？！」

「でも、貴女は私の声が聞こえている——これは、貴女が世界を救うことが出来るという証」

「私が、世界を救える……！」

「貴女に。運命を背負う覚悟は、ある？」

穏やかに、かつ強く、フェニックスは問う。

“世界滅亡”“運命”等、とても重要な言葉が並んでいる……マルーはまずそう思った。

「あの……！」

やがてマルーは意を決して口を開くと、フェニックスと目が合った。マルーの目にフェニックスの佇まいは、子を見守る親のように見えた。

「もし私が、世界を救えるなら——」

二つの世界の運命を背負わなくてはならない——大切な話ではあるが、今のマルーにとってそれはどうでもよかった。

「——友達も。私を護ってくれた人も。……救うことが、出来ますか？」

「はい、貴女なら雑作ありません」

今のマルーにとって“一番大切な問”に、フェニックスは当然であるように答えてみせた。

そう言うのなら……！マルーの気持ちは固まった。

「私、やるよ！皆も世界も、全部全部私が救ってみせる！」

「……では。未来を担う新しい戦士に、私の力を貸しましょう」

「ありがとう！フェニックス！」

「……私は、フェニックスソードを護るもの。貴女の名前を、もう一度教えて——」

「私は、丸山真理奈！マルーって、呼んで！」

「……ではマルー。左手を上にかざして、叫んで——」

「叫ぶ？何を？」

問いかけたものの、フェニックスの姿は見えなくなっていた。

言われた通りにするしかないと思ったマルーは、左手を挙げてみる。すると左手首から一番星のような光が放たれたのだ！

すぐ後に手首を光線が走り、やがて光が弾けると、マルーの左手首に銀の繊細なブレスレットが巻かれていた。

「……私分かった！どう叫べばいいのか！」

——転身！The Soldier！！

叫んだマルーへ黄金の鳥——フェニックスが光の如く旋回！マルーの姿をみるみる変えてゆく！

「黄色の戦士・マルー！転身完了っ！……ってええっ！？」

無彩色な景色から解き放たれたマルーの姿はうって変わってしまった。

「すごいすごい！ゲームの主人公になったみたい！」

「さあマルー、私をその手で掴んで——」

「あっ、いけない！」

熱くなった心を冷まし、茂みに刺さっていた“フェニックスソード”の柄を掴む。

「抜けてととととと——！」

引き抜く勢いのまま、後ろへバランスを崩しかける。今までビクともしなかった剣が、洗練な刀身を現したのだ。

「貴女の想いが私を強くします。さあ、一緒に——！」

柄を握り直したマルー。瞳に闘気が宿った！

一喝し飛び出したマルーはまず、捕まった三人を解放するべく駆け回る！それを最初に見た者は、凜だった。

「何よあれ！剣と鎧って……」

「やあーっ！」

「ええっ！？ま、マルー！？」

驚く凜のすぐ横でマルーの一太刀！リンを掴んでいた太い根はきれいに切り落とされた。

「はあ、助かったわ。でもマルーその姿——」

「話は後でね！」

マルーはすぐに向きを変え、健と竜也を怪物の太い根から解放させた。

「よし！これで後は――」

「ちょっとあなた！」

「守り人さん――あっ！この剣を渡す約束だったのに！」

「いいえ。今はあなたが持っているべきだわ。私が魔法で敵の動きを止めるから、あなたはその剣の力を引き出してとどめを刺すのよ！」

守り人が言い切ると、両手から雷撃を放った！雷撃は敵の全身を巡り、動きを鈍くする！

「さあ！あなたの番よ！」

「はい！……って、どうすればいいんですか！？」

「あなたの想うままに剣を振りなさい！想いがその剣を強くするのよ！」

「そっか！フェニックスも言ってた――」

剣を肩まで持ち上げたマルーが駆けた！前進するごとに、刀身に鮮やかな輝きが宿る！

「いっけええええええっ！」

跳躍したマルーが剣を大きく振り下ろすと、輝きはフェニックスに姿を変え、怪物を引き裂いた！

張り裂けそうな悲鳴が、光と共に森を駆け巡る……！

光と悲鳴は止み、森はいつもの平穏を取り戻した。呆気なく終わった戦いに、マルーはぼかんとするしかなかった。

「すごいわマルーっ！マルーがやっつけたわ！」

「……私、倒したの？」

「そうよ！マルーが必殺技で消し飛ばしたのよ！」

「ああ、見たぜ。金色の鳥が一直線に敵へ向かっていった」

「かっこよかったよーマルー」

「健、タツツー……そっかあ……私、守れたんだね！皆の事！」

やったー！と、マルーは剣を投げ捨て、三人を丸ごと抱き締めた。そのうちに、マルーは元の姿に戻るのだった。

「とりあえず、犠牲者は出なくて良かったわ」

「あっ、守り人さん！ありがとうございます！私、ちゃんと倒せました！」

眩しい笑顔で話すマルーに、守り人はそっと近付き、マルーの肩に手を置いた。

「やっと思付けたわ。新しい五大戦士」

「あ、そうよ！さっきまでの格好、戦士みたいだったわ！どういうことなのマルー？」

「……あの、フェニックスに言われたんですけど、世界が滅んじゃうって本当なんですか？」

「は？世界が」

「滅んじゃうですって！？」

「どういうことー？」

マルーは三人に、フェニックスに言われて引き受けた内容について話した。

「世界を救う為に戦士になってくれ、って……すんげえ事を引き受けたな」

「だって、三人を助ける為にどうしてもあの剣の力が必要で……あれ？フェニックスソードがない！」

「ここにあるわ」

先程マルーが捨てた剣は、守り人が持つ鞆に収められていた。

「そういえば、轉身する前はあの剣、重くて持ち上げられなかったや」

「当然だわ。この剣は、五大戦士に選ばれなくては重くて使えない物だもの」

「へえ！」

「おいこの人、さらりとすげえ事言ったぞ」

「すごい事？」

「あの人は、五大戦士？に選ばれているからあの剣が使えるんだろ？つまり、あの人も、世界を護る運命ってやつを背負っているっつー訳だ」

「それならおかしいわ。こんなにすごい人がいるのに、どうして同じフェニックスにマルーは選ばれたの？」

「そういえばそっか」

「どうしてなんですかー？」

「……それは、運命だからとしか言いようがないわ」

「運命？」

「何だそれ」

「どういうことよ」

「面白そーう」

四人から注目を浴びる守り人。少し黙り、それから口を開く。

「私達が住む世界“ローブン”と、あなた達が住む世界“アース”の二つの世界を、「影」という存在が滅ぼそうとしている——そんなお告げが、私のもとに届いたの。私は当然、私を含めた、前の五大戦士が戦うのだと思っていたわ。でも、お告げは違った。五大戦士はアースからやって来るって——」

「マルー以外にも、この世界から戦士がやって来るのか……」

「それにしても、どうしてこの世界から、なのかしら？」

「そう。この世界が何故関わっているのか——それを探る為に私は、この森に、守り人としてやって来たの」  
それで……と話を続ける守り人がおもむろに背を向け、そして腕を回し始めた。

「何をしているのかしら」

「体操じゃな——い——？」

「話の途中で体操するかよ」

「あっ！守り人さんの前で光が広がっている！」

守り人の腕で描く軌跡からやがて、人を通すことが出来る程の光の円が現れたのだった。

「この先は、私が住む世界——ローブンにつながっているわ。話の続きはこの先でしましょう、マルー」

「私……」

「おいマルー、行くつもりか？戻って来られるか分からねえんだぞ」

「マルーのそのプレスレットが、二つの世界をつないでくれるわ。安心して」

待っているわ、と言葉を残し、守り人は円の中に消えた。

「……行くのか、マルー？」

「うん。行くよ」

「何よあんた。怖気づいたの？」

「ちげえよ。出来すぎた話だと思って……だからこそ、俺も行くぜ」

「健……！」

「もちろんあたしも行くわ！“二人だけには”しておけないもの！」

「ちよ、赤石——！」

「ありがとう、凜！」

「僕も行くよ。世界のヒーロー……じゃなくて、ヒロインのお手伝いをするんだ。頑張るよー？」

「タツツーも！？ありがとう！」

「(あの野郎、変なところを強調しやがって)」

「皆、準備は良い？」

四人が同じ方向を見据えた。守り人が描いた円の間から、晴れ渡る青が手招きしている。

「この森とは違う匂いがする……」

「この先が“異世界” っつーことか」

「一体どんな世界なのかしら！」

「わくわくするねー」

「……行くよ！」

四人はゆっくりと、“異世界” へ足を踏み入れた……。

製品版へつづく……！

[体験版] イセカイサイクロン-アースの風の戦士達-  
<http://p.booklog.jp/book/116621>

著者： かーや・ぱっせ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/passeven7/profile>

著者ツイッター：<https://twitter.com/passeven7>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/116621>

最新話はこちらから！  
<http://mblg.tv/mensole15>

アンケートのご協力をお願いいたします  
<https://goo.gl/forms/RnsdR4y9q9uqV4TX2>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト